

第 32 回 北陸地方ダム等管理フォローアップ委員会 議事要旨

1. 日 時 令和 3 年 2 月 4 日 (木) 9 時 30 分～12 時 00 分

2. 場 所 (Web 会議方式)

3. 出席者 辻本委員長、池本委員、関島委員、中田委員、中村委員、平林委員、柳原委員

4. 議 事

(1) 大川ダム定期報告書(案)について

(2) 宇奈月ダム定期報告書(案)について

(3) 北陸地方ダム年次報告書(案)について

(1) 大川ダム定期報告書(案)について

【総括】

平成27年度～令和元年度の調査結果の分析・評価をとりまとめた大川ダムの定期報告(案)について、審議された。

その結果、治水・利水について適切な効果を発揮していること、環境への影響等についても、各種環境指標の状況に現状で問題ないことから、大川ダムについては適切に管理運用されていることが確認され、定期報告書(案)については了承された。

なお、委員会の審議に際し、各委員より出された主な意見等は下記のとおりである。

1) 防災操作

- ・なし

2) 利水

- ・なし

3) 堆砂

- ・なし

4) 水質

- ・大川ダムの水質は、揚水発電がある関係で、大内ダムからの影響をかなり受けると思われる。通常のダムであれば、水質調査地点は流入河川の2地点でよいと思うが、大川ダムの場合は大内ダムの水質モニタリングをより進めていく必要がある。

5) 生物

- ・コクチバスについて、H18以降、補足調査で確認されているとの記載がある。水温が低いため、このまま放っておくと個体数が増加する可能性がある。5年に一度の水国調査だけだと、個体群の把握は難しい。ある程度定期的な補足調査をお願いしたい。

6) 水源地域動態

- ・H26のダム利用者数は調査時の気温が低かったため減少した、と記載されている。通常版ダムカード配布数をみると、H30からR1で下がっていることもあり、ダム利用者数の減少には気温以外の要因もあるのではないかと。何がダム利用者数の変化要因になり得るのかということについて、分析をした方がよい。

(2) 宇奈月ダム定期報告書（案）について

【総括】

平成27年度～令和元年度の調査結果の分析・評価をとりまとめた宇奈月ダムの定期報告（案）について、審議された。

その結果、大川ダムと同様に、治水・利水について適切な効果を発揮していること、環境への影響等についても、各種環境指標の状況に現状で問題ないことから、宇奈月ダムについては適切に管理運用されていることが確認され、定期報告書（案）については了承された。

なお、委員会の審議に際し、各委員より出された主な意見等は下記のとおりである。

1) 防災操作

- ・なし

2) 利水

- ・なし

3) 堆砂

- ・排砂の目的として、ダム機能の維持、下流河川の河床低下防止、河岸侵食の進行抑制と記載されている。ダム下流に関して、目的達成状況については把握されていない。次回報告時には、排砂の効果も含めて、整理して欲しい。
- ・排砂委員会では毎年の排砂について評価している。定期報告では、それをどういう風に見るのか、目的と絡めてどういうのが保たれているという事を、どこかに記載するやり方を考えて欲しい。

4) 水質

- ・なし

5) 生物

- ・排砂委員会での調査・評価結果を、FU 委員会でどのように見ていくか、ということをもう少し詰めておかないといけない。委員会同士の連携が必要である。

6) 水源地域動態

- ・なし

(3) 北陸地方ダム年次報告書（案）について

【総括】

大石ダム、手取川ダム、大町ダム、大川ダム、三国川ダム、宇奈月ダム、横川ダムの7ダムについて、令和元年度の管理・運用状況を取りまとめた北陸地方ダム年次報告書（案）について、報告された。

なお、委員会の審議に際し、各委員より出された主な意見等は下記のとおりである。

1) 防災操作

- ・流木処理について、現状は流木回収量だけで評価しているが、処理方法や管理上の課題もFU委員会で議論が必要である。

2) 利水

- ・なし

3) 堆砂

- ・なし

4) 水質

- ・ボーレンバイダーモデルを見ていくと、大町ダムが中栄養レベルにあり、このままだとおそらく富栄養レベルに達すると思われる。単位面積あたりの負荷量が近年2桁になっているため、注視ではなくある程度の対応を考えるべきである。今すぐに対応、ということではないが検討は始めるべきである。
- ・大町ダムの水質に関しては、上流ダムとの連携が必要である。

5) 生物

- ・外来種の侵入については、対策に力を入れて適切に対応していると思う。ただし、ダムがホットスポットとなって下流側に種子を供給し外来種拡大を促進してしまう可能性がある。そのため、モニタリング地点はダム湖周辺だけでなく、下流河川にも設定して欲しい。
- ・特定外来種の調査方法について、経年変化をみるためには調査手法を統一することが必要だが、一方で従来の調査方法では調査精度に限界がある。例えば、魚に関しては環境DNA調査等もある。網羅的に判断するのは水国調査に任せて、特定外来種の侵入状況を確認するのであれば、環境DNA等の活用も検討してもよい。

6) 水源地域動態

- ・宇奈月ダムの日本酒醸造の例にもあるように、周辺地域との連携が重要である。また、直轄ダム同士だけではなく県のダム等とも連携するとよい。また、こうした社会状況でもあるため、ダムに来てもらう、ダムから情報等を発信することだけでなく、その活動によって地域とのつながりを広げていくことを前面に押し出して欲しい。